

飢えを書くということ

モニク・トゥルン／吉田恭子（訳）

まず簡潔な断定から始めましょう。飢えというものを理解してはじめて、人は食べものの力そして意味を理解できるのだ、と。一番の基本として、飢えは食料の欠乏であり身体が食べものを必要とし欲しがっている状態です。

この世界で極めて恵まれた人々にとって飢えは些細な身体の不快に過ぎず、簡単にすぐに癒すことができます。サンドイッチをテイクアウトし、自販機でスナックを買い、電子レンジでスープを温めればよいのです。

飢えはまたもちろん、食べものが癒してくれるはずなのにそうはならない場合の、他のものへの渴望をも意味します。

食卓に座るという慣習、これは共同体や家族の劇場と見なせないでしょうか？自分のことや自分の健康を気に掛けてくれている誰かが準備した料理を食べること、これは愛情や思いやりが形となって表現されたものではないでしょうか？さらに、鮮やかで深みのある旨味、天上からの太陽の光と足元の大地によって養われた滋味を味わうこと、これは土地に根付くという感覚、そして自分がある場所に属しているという喜びの具現化ではないでしょうか？

わたしの小説や随筆がこだわっているのはこの後者の飢え、肉体の飢えよりむしろ精神の飢えなのです。とはいえもちろん両者はよく絡み合っているのですが。

作家として、わたしは食べものと食餌行為に惹きつけられます。パフォーマンス、儀式、代替行為、褒美と罰、喜びと抵抗、そして創造力とコミュニケーションの手段としての食べものと食餌行為です。要するに、食べものそのもの以外のすべて、です。樹上で完熟したスモモのことを書いたとして、日の光で弾けたその紫の皮について書いたとして、わたしは読者にスモモを食べたいと思って欲しくてスモモを描くわけではありません。物語そしてテキストの世界の中でそのスモモが表象するもの、表現するものを目指しているのです。実際の生活ではもちろんわたしもスモモを食べたいと欲するでしょう。でも文学においてわたしが求めるスモモはそれよりももう少し複雑で微妙なものなのです。

わたしの最初の小説、『ブック・オブ・ソルト』（彩流社、小林富久子訳）は、食べものに満ちた小説だとよく言われてきました。ビンという名の一人称の語り手はベトナム人の若い同性愛者で、ガートルード・スタインとアリス・B・トクラスのパリの家で住み込み料理人として働いています。でもこの小説を別の見方から考えてみましょう—これは飢えに満ちた小説なのです。

食べものに囲まれて、起きている時間の大半を台所や市場で過ごすにもかかわらず、ビンは絶えず飢餓感に苛まれています。彼は人との交わり、愛情、家庭、自分の名前を正しく呼んでくれる誰かに飢えていて、ことばそのものに飢えています。現在滞在している国のことばであ

るフランス語も、現在の雇い主のことばである英語も達者でなく、人間にとって必要不可欠である言語なしであまりに長くやり過ぎしてきたので、ピンはまるでやせ細って骨と皮ばかりの飢餓状態の人間のように、ほとんど周りの人々の目に入らない状態にあるのです。

この小説の第13章では、ピンはスタインとトクラスのお伴をしてローヌ川渓谷にある小さな農村ピリニンの別荘に来ています。ここでピンはことばや人との交わりの代わりに酒を求めています。ところが皮肉にも酒を飲めば飲むほど、食欲を失っていき、その結果文字通り自身の肉体が消え細り、枯れてしまいそうになってしまうのです。

ピリニンではパリと同じく日曜日が休みだ。村の農民たちは親切心から、そして生まれて初めて目にしたアジア人ということでまずは単に好奇心から、僕を家々に招いてくれた。しかも農家の息子たちは毎度招待を受けたくなるほどハンサム揃いだったことは認めておかなければならないだろう。この地域では皆自宅で自家用ワインを醸造するため酒が足りないことはありえないし、ちょっと水が飲みたくなるぐらいまで気前よくグラスを満たしてくれるのだ。こんな夜の終わりに水を飲むと月曜日に仕事に戻るのが楽になることに気がついた。時には水が足りないこともあるのだけれど。そんなときは翌朝、ミス・トクラスが台所で鍋やフライパンをガチャガチャいわせている音で目が覚めるのだ……

もちろん、僕だってこんな体たらくをしょっちゅう見せないように気を遣っていて、せめて夏の間に二、三回に留めておこうと努めてはいる。ピリニンでは酒は水より安いだけ。実のところただなのだから。ここの農民は僕にさしてなにかを求めることもなく、もしそうだとすると、パリのフランス人とは違って、僕の舌でとぎれとぎれになるフランス語の音を楽しんでいるかのようだ。ときにはちょっとヴェトナム語を聞かせてと頼まれることもある。彼らは眼を閉じ信じ切って神妙な様子で熱帯の鳥たちが歌うさまを思い浮かべる……

ピリニンの農民は馬のように働き馬のように酒を飲む。このふたつの活動は互いにまるっきり影響を与えないようだ。けれども僕は酒を飲むほど食欲と体重が減っていった。夏の終わりには、ガートルードスタインが挨拶をよこすときにもくどい言い回しをせずにはおれない様子だった。「あら、こんにちは、痩せの痩せのピン」

食欲のないコックは悲惨である。それどころかコックとして疑わしい。奥様方のために準備しているどんな料理をひとさじ、ひと口、ひとかけ味見できなくなってしまうと、味見は調理に不可欠の要素であることを僕は忘れはしない。ろうそくの光のように揺らぐ味、鮮やかな酸味と塩気のマリアージュ、微かなスパイスが火花を発する芳しい香り、これらすべてはものの数秒で変化してしまうし、油断のない舌尖だけがもはや後は食すのみというぴったりの瞬間を探り当てることができるのだ。経験不足のコックがこのような状況だと悲惨な結果を招く。両眼をぴったり閉じて仕事をしようとする肖像画家を思い描いてみるがいい。僕はもちろん抜け目ない記憶のお陰で料理の質をたもつことができる。両手が以前の動きをそのまま再現することができる。ただ体重が減っていくのは隠しおおせられず、寂しげな表情となって顔にも表れるが、奥様と奥様にはまだ気付かれていない。*

*

二作目 *Bitter in the Mouth*（『口に苦い』未訳）では、一人称の語り手リンダ・ハマリックは神経学的症状、つまり一種の共感覚があり、大方の単語を耳にしたり口にしたりすると味覚を感じる症状の持ち主です。

わたしにとって、リンダの症状、あるいは彼女が言うところの「秘密の感覚」は、自分と他者とを区別しているとわたしたちが信じているさまざまな違い、眼に見える差異や見えない差異、察知できる差異やできない差異の、鮮やかなたとえです。リンダの症状、というよりはむしろ長年の経験で「秘密の感覚」を隠蔽することを会得した彼女の抑圧もまた、ひとと繋がりたいという飢えるような渴望の隠喩なのです。ピンと同様、彼女の世界も様々な味覚に満ち溢れています。しかし、「他と違う」あるいは「他者」と見なされている我々多くと同様、彼女もつかみ所のない sustenance すなわち滋養物／食物／希望と、人と繋がることで得られる慰めとを渴望し続ける状態にあるのです。

Bitter in the Mouth の第2章で、リンダは自分の症状、食べものことばとが絡み合っている独特の状態を自分がどのように捕らえているかを明かします。

最初の記憶は味覚だった。生きての間ほぼずっとこの事実を神秘でなく秘密として抱えてきた。いまだに神秘ではあるのだけれど。その神秘にはふたつの側面があった。それぞれ中でほかの室や房に別れていた。口に苦い味があり、それはことばが引き金だった。

味覚の側面から始めよう。

その苦みは身体に良い緑黄色野菜が往々にして口に苦いのと似ていた。あるいは沸々と煮える恨みが苦い味がするのとも似ていた。

食べものにもことばの綾にもぴったり合う味をわたしはまだ見つけられていない。けれどもそのような対応関係が見つかったとしても、わたしにとってはなにかを伝えたという幻想でしかなく、あなたにとっては理解をしたという幻想に過ぎない。たとえば、わたしの最初の記憶は青いバナナの味だった、と主張することだってできる、そうすればあのいやな味をよく知っている世間の氣勢が頷いてくれるだろう。けれども皆が皆同じ未熟な果実を味わったというわけではない。世界でひとりぼっちだと感じないためには、主観的な記憶の境界をぼかして、そうして互いにこう言い合うのだ、「あなたの言いたいことわかるわ！」と。

神秘のもうひとつの側面にことばがある。

それを口にしても耳にしても味覚が伴わない数少ない単語はわたしにとって聖域、自分の心臓が鳴っている音を耳にするぐらいははっきりとことばの意味を聞くことができる修道院の静かな中庭だった。他の語彙には沈黙の誓いを破った修道士の一团がひしめいていて、わたしにその姿をさらしてくる。それは心の奥底の哀しい気持ちや宗教的恍惚心ではない。法衣の下に纏っている服の色でもない。それは彼らが最後に口にしたもの味の味なのだ。

*

わたしは第三作目の長編の下調べをするためにここ日本に来ています。日米芸術家交換プログラムのおかげで来日し、ラフカディオ・ハーンについて調査をしています（2015年6月現在）。

ハーンはギリシャ人とアイルランド人の間に生まれ、1850年から1904年まで生きた作家です。イオニア海のレフカダ島に生まれ、アイルランドに育ち、フランスとイギリスで学び、青年としてアメリカに渡り、その後1890年に日本に渡りました。東京で亡くなったときには小泉八雲として知られていました。

小説は八雲の人生で重要な役割を演じた四人の女性によって語られます。イオニアの島民であった母のローザ、アフリカ系アメリカ人の妻アレシーア、ヨーロッパ系アメリカ人のジャーナリストで編集者そして八雲の長年の友であり最初の伝記を書いたエリザベス、そして日本の妻であり四人の子の母であり文学的協力者としての貢献が十分に世に知られていないセツです。八雲について著作の多いオーストラリアの作家で文学研究者のロジャー・バルバースによると、八雲は物語「再話」の名人でした。わたしはこの見方を修正して、八雲は話を聞く名人だったと述べるつもりです。八雲が本当に「聞いた」とついに満足するまで、セツがしばしば何度も何度も繰り返し怪談を語って聞かせたように。

The Sweetest Fruits (『かくも甘き果実』) が小説の仮題です。執筆中の作品の冒頭部分を紹介して締めくくりたいと思います。ここで語っているのは八雲の母親です。

パトリシオ・ラフカディオ・ハーンは空きっ腹で生まれてきた。乳を吸うさまからわかった。あの子の口が乳首を発見した瞬間から、目を見開いて瞬きもせずじっと見つめて、引き剥がすならやってみろと言わんばかりに離れようとしなかった。

赤ん坊は誰だってお腹を空かせて生まれてくるけれど、これほど喉から手が出るような目つきをして誰もが生まれてくるわけではない。

翻訳 吉田恭子

* 『ブック・オブ・ソルト』からの抜粋は吉田による試訳です。